[活動報告]

東北大学附属図書館2023年度企画展「伊達騒動」実施報告

小野寺 毅，中島 大，影山 啓太，武田 小百合，田名部 晃平，小林 千夏，須田 洋子，
西村 美雪，佐々木 智穂，真籠 元子，半澤 智絵

1. はじめに

東北大学附属図書館(以下，当館)展示ワーキンググループ（主査は情報サービス課長。以下，WG)では，例年，当館所蔵資料を使った企画展示を行っている。近年は，COVID-19流行の影響により2020(令和2)年度は実施せず，2021(令和3)年度は貴重資料の画像を使ったオンラインのみの企画展示を行った。2022(令和4)年度は，資料そのものではなく，「蔵書印」をテーマにしたパネル展示とオンライン展示を行った。2023(令和5)年度は，4年ぶりに所蔵資料を使い，仙台藩で発生した「伊達騒動」をテーマに，リアルとオンラインの両方で展示を行った。また，本展示はWG発足以来初めてとなる教員監修による展示となった。以下の通り，立案から実施までを報告する。

2. 方針およびテーマ

近年当館で実施してきた企画展示は，2000(平成12)年前後に試行として行ったものが始まりであり，当館の協力研究員の指導をうけつつ，テーマの設定や資料の選定，解説及びパネルの作成，広報等の全てを職員が行ってきた。これらの活動は，当館が所蔵する資料への注目を集め，大学のブランディングに資する企画として一定の効果があったものと考えられるが，一方で，専門の研究者ではない職員が主として準備を行っているため，後になって解説やコレクション紹介の中に誤りが発見されるといった問題が発生していた。また，特定の資料に展示利用が集中することで資料の劣化に繋がっているといった資料保存上の課題も指摘されていた。それらを踏まえ，2023(令和5)年3月に行われたWGにおいて，展示テーマの設定や資料の選定，解説の作成を学内教員に依頼する提案があり，今後3年間を目安に本方針で実施することが決定した。また，展示資料の偏りによるダメージ蓄積への対策は，これまで展示の機会が少なかった古文書を中心に据えることとした。この方針の下，2023(令和5)年度企画展については，WG事務局より文学研究科の籠橋俊光准教授に監修を依頼し，本企画展の構想が開始された。

2023(令和5)年4月，籠橋准教授と事務局で打ち合わせを行い，改めて事務局より，監修依頼の意図やこれまで関心が低かった古文書の展示，研究支援(アウトプットの場の提供)を目的とした展示を行っていきたい，との説明があり，籠橋准教授からは複数の古文書展示企画の提案があった。リアル展示は大学祭(10月27日～10月29日)前後の開催を目指していたことから，それまでに調査や解説作成が可能かどうかを中心に検討を行い，籠橋准教授より提案されたものの中から実現性の高い「伊達騒動」をテーマとした展示を行うことが決まった。また，現物の展示のほかWeb上で展開するオンライン展示も検討中であることについて確認を行った。

この後，5月に2023(令和5)年度第1回WG会議を開催し，WGメンバー内で今年度の方針及び展示テーマを「伊達騒動」とすることなどを共有した。また，昨今の光熱費高騰の影響により費用は極力抑えることとなったが，このことは後述する広報の大きな制約となった。なお，この時点では展示点数は10点程度を想定しており，これまでの展示と比較すると規模は小さくなる見込みであった。また，当初から展示の英語化についての意見も交わされたが，このことについては別途報告する。

6月に開催した第2回WG会議では，籠橋准教授より，展示の趣旨や構成についての説明のほか，伊達騒動および伊達家に関わる当館古文書群の概要など，本展示に関わる基本的な事項について，WGメンバーに解説があった。これを基にWGメンバーより，資料から人物絵を取り出して相関図を作成する案やギャラリートーク実施の要望など，本企画展の特徴となる具体的な内容が提案された。その後，リアル展示の期間は10月27日(金)～11月5日(日)に決定し，それを目標に準備を開始した。

作業は，籠橋准教授が資料の調査，展示資料の選定，キ

ャプションと各種パネルの原稿および釈文の作成を担当し，WGメンバーがパネルやキャプションのデザイン作成，ポスター作成を含めた各種広報，目録の作成，オンライン展示の作成および英語化を担当した。WGでは，現物資料を用いた展示を中心に担う「リアル班」と，オンライン展示を中心に作業を行う「オンライン班」に分かれて作業を行うことにした。リアル班は本館での作業に関わることから，本館に所属する中島（リーダー），武田，須田，佐々木，小野寺が担当し，オンライン班は分館に所属する影山（リーダー），小林，西村，田名部が担当となった。班分け後，各班内において作成物やターゲット層を洗い出し，デザインや配色，フォント等について意見を出し合った。その後，WG内での意見調整と担当教員の意見を反映し，デザインコンセプトを確定した。以降，主に各班において準備作業を進めた。また，相関図（小林，中島，影山），年表（影山），谷地境界図（小野寺，佐々木），城下図（真籠，佐々木），ブックカバー（須田）については，班分けとは別に担当者を決め，作成に当たった。

3. リアル展示

資料現物を用いたリアル展示は4年ぶりとなるため，本格的な展示企画を経験していないWGメンバーも多く，準備段階で過去の企画展の蓄積されたノウハウを都度参照した。一方で過去のリアル展示では資料保存の観点等で問題点も指摘されており，これらを踏まえつつリアル展示の準備に取り組んだ。

3.1 開催期間と開催場所

前章のとおり，開催期間は10月27日（金）～11月5日（日），また，開催場所は当館1号館1階多目的室とした。

開催期間は，過去に1か月以上だったこともあるが，長期間の展示は資料の損傷リスクが増えることに加え，展示室で受付を行う職員負担も考慮し，10日間の開催とした。

開催場所は，来場者を増やすことを目的としてより人目にふれやすい会場も候補に挙がったが，直射日光が当たらない，温度・湿度の管理が比較的容易などの資料保存の観点から，多目的室で行うことが決まった。

3.2 展示資料・会場の準備

籠橋准教授による展示資料の選定と並行して，会場内レイアウト（図1）や展示ケース内の資料の配置（図2）を職員と教員とで複数回にわたり確認し，全34点の資料現物を展示することになった。解説等の各種パネルのデザインは職員が原案を作成し，最終的に籠橋准教授の了承を得て決定した。

図1　会場内

図2　展示ケース内では資料現物と解説文・釈文（翻刻）を展示した。

3.3 内容構成

会場入口に武田が作成したポスター（図3）をデジタルサイネージに投影し来館者の目を引くようにした。

展示内容は伊達騒動のきっかけからその終結までを時系列に全4章，演劇の幕を意識したタイトルで構成された。

・1章：逼塞　-殿様が消えた-

・2章：六ヶ条　-後見人に挑む-

・3章：谷地　-一門の激突-

・4章：終演　-刃傷の果てに-

それぞれの章の冒頭には，解説文をB2サイズのパネルで掲示，全ての展示資料に釈文（翻字）とA5サイズの解説をつけた。その他，必要に応じて人物相関図や展示資料が属する文書群の解説などもパネルで掲示した。

伊達騒動の始まりと言われる1章の伊達家三代藩主綱宗の逼塞，一門内での対立激化を象徴する出来事として知ら

れる2章の六か条問題，3章の谷地争論では，当館所蔵資料を展示した。中でも伊達騒動に関する書状等を含む「寛文事件古文書」と「登米伊達家文書」を多く展示した。4章「終演」は著名な刃傷沙汰を取り上げたものであるが，残念ながらそれに関する直接的な資料は当館で所蔵していないため，その後の関係者の交流がわかる資料や，3章とも関わる後世の領地の境界線が書かれた絵図，伊達騒動を取り上げた錦絵(個人蔵)が展示された。

伊達騒動の複雑な人間関係を図示した人物相関図と年表は，B2のサイズでパネルを作成した。とりわけ，人物相関図に対して肯定的な意見が複数寄せられ，パネルの前で足を止めて見つめる来場者もいた。そのため，会期途中からではあったが，人物相関図と年表はA4に印刷したものを来場者に配布することにした。

加えて，視覚的効果を狙い，大型ディスプレイを用いて，3章に関わる絵図，伊達騒動関係者の仙台城下での屋敷配置のスライドショーを上映した。展示の最後には「書籍で読む伊達騒動」コーナーを設け，伊達騒動に関して書かれた図書の現物を展示し，自由に手に取って見てもらえるようにした。

図3　企画展ポスター

この他，館長と監修者の挨拶文をB2で印刷したパネルも掲示した。本WG側の工夫として，今回の展示で使用した資料群の中から3点をモチーフとしてブックカバーを作成し来場者に無料配布したが，開催期間中に複数回増刷しなければならないほどの好評を得た。

来場者からの感想は大変好評であった。これは，籠橋准教授の監修により，騒動の経緯がよくわかりかつドラマティックな構成となったこと，資料自体の面白さを引き出す解説が付されていたこと，展示全体が始まりから終わりまで流れが非常にまとまったものであったためである。

4. オンライン展示

オンライン班は分館所属のメンバーで構成され，オンライン展示サイトの構築を主として，オンライン上での広報(SNS投稿，各種イベントサイト掲載申請)も担当した。

4.1 構築体制

今回は，本学で契約しているGoogle Workspace for Educationのサービスである「Googleサイト」を用いて公開した。

これまでは，本学での制限により，Googleサイトの外部公開ができなかったが，折しも2023(令和5)年8月より，Googleサイトの外部公開のサービス提供(申請制)が開始された[1]。

Googleサイトは，従来のHTML形式によるウェブサイトの作成と比較して，専門知識がなくとも構築が容易であり，レスポンシブデザインにも対応している。また，アクセス分析ツールのGoogle Analyticsとも親和性が高く，運用管理の面でメリットが大きいことから，本サービスでの構築公開をワーキンググループ内で提案し，承認を得た。申請名義および責任者は，次年度以降の運用管理も考慮し，事務局担当者および本館情報サービス課長とした。申請は同日中に受理され，本学情報部により割り当てられたGoogleドライ

1 東北大学データシナジー創生機構情報基盤運用室共通基盤システムグループ. “Googleサイト限定公開”.東北大メールサイト. ※リンク先にある詳細ページは東北大メールユーザーのみアクセス可。https://www.bureau.tohoku.ac.jp/i-synergy/tumail/tumail_etc.html#site(確認日:2023-11-24)
同. “Googleサイトの外部公開について”. 東北大学グループウェア掲示板. ※東北大学グループウェアユーザーのみアクセス可。https://gw.tohoku.ac.jp/garoon/cgi-bin/cbgrn/grn.cgi/bulletin/view?cid=131&aid=129595(確認日:2023-11-24)

ブに担当メンバーへの管理者権限が付与され，スムーズに作業が開始できた。

サイト作成は，Google Chatのオンライン班メンバー用スペース上でコミュニケーションを図りながら作業を進めた。展示資料のデータについては，籠橋准教授とGoogleドライブ上で共有しながら，同じサービスのプラットフォーム上にて効率的に作業ができた。

4.2 コンセプトと構成及びデザイン

展示サイトの構成は下記の通りである。

・トップページ（概要）
・1. 逼塞 -殿様が消えた-
・2. 六ヶ条 -後見人に挑む-
・3. 谷地 -一門の激突-
・4. 終演 -刃傷の果てに-
・監修者メッセージ
・ミニゲーム（錦絵パズル）
・アンケート（Google Form）

基本的にはリアル展示の構成を引き継ぎ，実物での展示見学が叶わなかった方々にも雰囲気を再現できるよう，章構成，展示順，キャプション，各章のカラーコンセプトおよびキャッチ画像はリアル展示と同様とした。

トップページは図4の通りで，「伊達騒動」というテーマに沿い，できるだけ目を引くインパクトのあるものとし，イメージにもマッチする色合いやデザインをポイントとした。また，トップページ下部に概要を記述し，そのままスクロールで順を追って閲覧できる構成とした。

加えてサイドメニュー及びページの上部と下部に目次リンクを作成し，クリックやタップで該当資料の項目部分に飛べるようにした。

図4 オンライン展示サイトトップページ
https://sites.google.com/tohoku.ac.jp/date-dispute/
（確認日：2023-11-24）企画展ポスター

各章にあたるページは，基本白色背景とし，見出し部分にポイントとしてコンセプトカラーを使用した。ただし，「4. 終演 -刃傷の果てに-」については，コンセプトカラー（マゼンダ）および刃傷沙汰の印象を強く押し出すため，図5の通り黒色背景に白色本文のページとした。

図5 「4.終演 - 刃傷の果てに -」ページ
https://sites.google.com/tohoku.ac.jp/date-dispute/4
（確認日：2023-11-24）

4.3 公開

オンライン展示サイトは，リアル展示と同時公開も当初視野に入れていたが，WGメンバーおよび教員への内容確認やその他調整に時間を要し，リアル展示終了後の11月9日（木）に公開した。

バナーはポスターのデザインをベースに，田名部の案（図6）が採用され，図書館ウェブサイトのトップページやオンライン展示公開のお知らせページにリンクバナーとして掲載したほか，当館SNSでの広報画像にも使用した。

図6 オンライン展示用バナー

図7　当館SNS(X)アカウントでの広報例。
https://twitter.com/hagi_no_suke/status/1722526932229894649
(確認日:2023-11-24)

4.4 オンライン展示の独自コンテンツ

オンライン展示では，リアル展示では実現できなかったコンテンツや，オンラインの特性を活かしてブラッシュアップしたコンテンツがあり，本項ではそれらについて述べる。

4.4.1 人物相関図の動画化

リアル展示で好評であった「人物相関図」について，展示を見学した当館館長から，「オンライン展示で動画化を検討してはどうか」とのアドバイスがあった。

相関図を担当したメンバーで議論し，相関図の元スライドデータ(Microsoft PowerPoint)にアニメーション効果を付け，各章のトピックの主要人物のみを浮かびあがらせるような演出を加えた動画ファイルを作成し，展示サイトに掲載した(図8)。相関図の再生ボタンをクリックすると，各章のトピックの主要人物部分のみが残る演出を加えている(各章約10秒)。

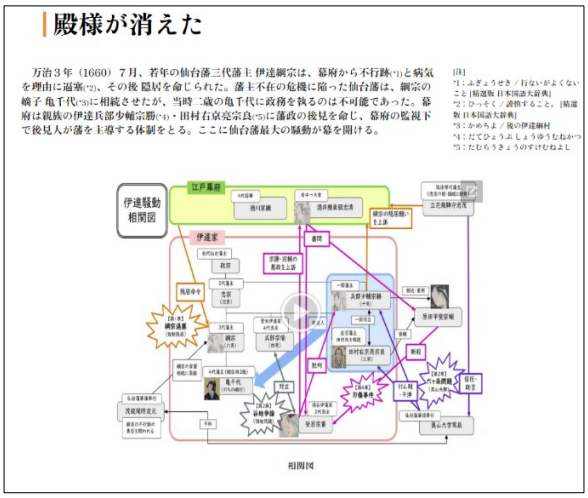

図8「1.逼塞- 殿様が消えた -」ページ内の相関図
https://sites.google.com/tohoku.ac.jp/date-dispute/1#h.krghqnrez1ij
(確認日:2023-11-24)

4.4.2 ミニゲーム(錦絵パズル)

オンライン展示では，前年度にならいオンラインならではの独自コンテンツとして，今回も展示内容に関連した，サイト上で楽しめるゲームコンテンツを作成・公開することとなった。

Googleサイト上で動作できること，プログラムがオープンソースで利用可能であることを条件に，オンライン班で調査・議論した結果，以下の2案が挙がり，テスト段階のサイトに試しに搭載した。

・スライドパズル

・ブロック崩しゲーム

テストサイトにて検証した結果，Googleサイトの仕様上，ブロック崩しゲームは一部動作が正常に機能しないことが判明し，スライドパズルを採用することで決定した。

使用する画像は，展示資料の中でも華やかで，難易度やパズルの素材として適当である「伊達競阿国歌舞妓」の錦絵画像を採用した。デフォルトではスライドパズルで一般的な3×3マスで表示されるようにしているが，最小2×2マス～最大10×10マスの範囲で適宜設定を変えて遊ぶことができる(図9)。

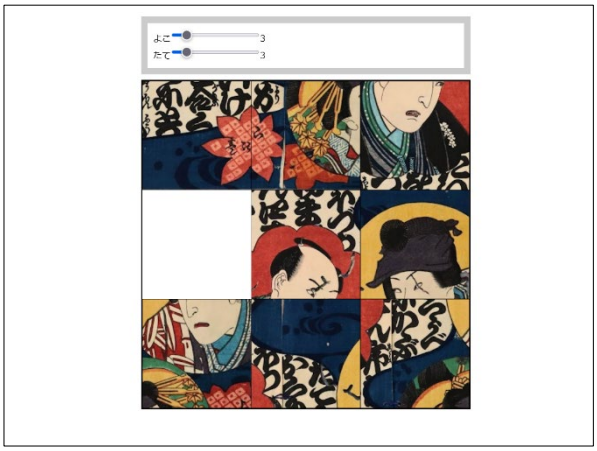

図9「ミニゲーム(錦絵パズル)」ページ
https://sites.google.com/tohoku.ac.jp/date-dispute/mini-game
(確認日:2023-11-24)

5. ギャラリートーク

本企画展では，来場者に展示内容をより深く理解しても

らう機会として，リアル展示開催期間内にギャラリートークを2回開催した。日程は，学生が参加しやすい平日と学外者の参加が見込まれる大学祭もしくは文化の日に1回ずつ行うこととし，10月30日（月）14:40～と11月3日（金）14:00～に，各30分間行うこととした。人数は会場や展示資料配置の都合上，各回15名を上限とした。申込はGoogleフォームにより受け付け，後述の広報物等にURLまたはQRコードを掲載して周知した。当初申込期限は10月25日（水）に設定していたが，前日の24日（火）に定員に達し，締め切ることとなった。トークの内容や構成，配布資料はすべて籠橋准教授が作成・準備した。トークでは，はじめに展示の趣旨や伊達騒動の概要を説明した上で，展示順（時系列順）に沿って展示資料の解説が行われた。解説においては，騒動勃発時の時代背景，登場人物同士の関係性，そして文書が記されるに至った経緯等について，丁寧な説明がなされ，熱心にメモを取る参加者も見られた。各回とも，トーク後に教員に質疑をする参加者が多くおり，大変好評であった。また，リアル展示開催前日の10月26日（木）には，内覧会を兼ねた図書館職員向けのギャラリートークも実施した。

6. 広報，統計

6.1 広報

本企画の広報は，10月6日（金）に当館ウェブサイトの「お知らせ」に掲載したことを皮切りに開始した。特にSNS（X，Instagram）で積極的に広報を行い，図書館公式アカウントでの投稿はもちろんのこと，学内の広報担当部署や関係部局，大学祭実行委員会に投稿・リポストの依頼をし，協力を得た。

一方で，例年の展示では近隣の関係機関にポスターやチラシを送付していたが，今年度は予算の都合上，メールによる案内を中心に，送料をかけずに引き渡すことができる学内や一部機関に配布・掲示依頼をするにとどめた。関係機関以外では，仙台市地下鉄の「地域情報ボード」へポスター掲示を行った。地域情報ボードは，自治会，地域サークル等の団体や学校等が主催する仙台市内の地域活動や催事等のイベントを広告・宣伝するためのポスターを無料で掲出できるもので，10月23日（月）～11月6日（月）の間，北四番丁駅，青葉山駅，富沢駅に掲出した。

また，広報開始時期が遅かったこともあり，広報はウェブ媒体を中心に行ったが，ウェブ媒体への広報は主にオンライン班が行った。無料で登録できる宮城県内のイベントサイトに絞って10月上旬～中旬にかけて調査し，オンライン班で手分けをして掲載申請を行った。結果，「リビング仙台WEB」などのサイトに掲載された。

一方で，マスコミに対しての広報は行っていなかったが，籠橋准教授を通して連絡の上，開催後ではあったが大学からプレスリリースを行ったところ，10月31日（火）に河北新報の取材があり，11月2日（木）に記事が掲載された。記事掲載による来場者数の変化は次項にて述べる。掲載後は，担当窓口である貴重書係への電話による問い合わせが多数寄せられた。

6.2 統計

リアル展示開催期間の10月27日（金）～11月5日（日）の来場者は計562名であった。各日の人数は以下のとおりである。

表1 来場者数

年月日	来場者数	備考
10月27日（金）	51	大学祭
10月28日（土）	39	
10月29日（日）	43	
10月30日（月）	39	ギャラリートーク開催
10月31日（火）	42	
11月1日（水）	24	
11月2日（木）	77	河北新報掲載
11月3日（金）	117	ギャラリートーク開催
11月4日（土）	64	
11月5日（日）	66	
合計	562	

アンケートには361名から回答があった。回答は次項に掲載（記述式は一部を抜粋）するため，詳細は割愛するが，回答者のおよそ7割が学外からであり，年齢は50代以上が7割弱を占めた。また，展示を何で知ったか（複数回答可）という質問に対しては，「その他」が149件で一番多く，そのうち記述欄に河北新報の記事によるものが121件に上った。来場者数を見ても，10月27日（金）～11月1日（水）までが1日平均39.7名であったのに対し，河北新報に記事が掲載された11月2日（木）以降は，1日平均80名になっている。後者

は3連休を含んでいる影響もあると考えられるため，単純に比較はできないが，新聞への記事掲載の影響は大きいと思われる。感想では，「良い企画，展示であった」「伊達騒動を知らなかったが，勉強になった」などの高評価が多かったが，広報不足を指摘する意見も複数あった。

6.3 アンケート回答

1.ご来場日

回答	回答数
10 月 27 日(金)	18
10 月 28 日(土)	17
10 月 29 日(日)	12
10 月 30 日(月)	26
10 月 31 日(火)	27
11 月 1 日(水)	15
11 月 2 日(木)	58
11 月 3 日(金)	86
11 月 4 日(土)	52
11 月 5 日(日)	50

2.ご所属は？

回答	回答数
1.東北大学の学生	70
2.東北大学の教職員	37
3.高校生	2
4.中学生以下	3
5.他大学の学生・教職員	15
6.東北大学の OB・OG	33
7.一般	193
8.その他	8

3.お住まいはどちらですか？

回答	回答数
1. 仙台市内	261
2. 宮城県内	67
3. 宮城県以外※	33

※内訳(都道府県)	回答数
北海道	2
青森県	6
岩手県	4
山形県	2
栃木県	1
群馬県	1
埼玉県	1
千葉県	2
東京都	8
神奈川県	1
静岡県	1
愛知県	2
島根県	1
福岡県	1

4.年齢

回答	回答数
1. ～19 歳以下	18
2. 20 代	70
3. 30 代～40 代	31
4. 50 代～60 代	137
5. 70 代以上	103
(空白)	2

5.展示をどこで知ったか(複数回答可)

回答	回答数
1. ホームページ	30
2. ポスター	41
3. チラシ	20
4. SNS	14
5. 知人から聞いて	53
6. 館内表示を見て	86
7. その他	149

6.もっとも興味を持った部や資料・内容などを教えてください。

六ヶ条問題，谷地争論，寛文事件古文書，登米伊達家文書，原田宗輔書状（原田甲斐宗輔手簡），奥山常辰書状写，桃生郡大窪村絵図，錦絵，籠橋准教授の話，年表，相関図，関連書籍，全部　　等

7.ギャラリートークについての感想や，今回の展示に関してのご感想などお聞かせください。

・良い企画，展示であった
・古文書の実物を見ることが出来て感動した
・伊達騒動を知らなかったが，勉強になった
・仙台の歴史を学べてよかった。
・相関図があってよかった。
・広報をもっとやってほしい
・今後も資料の展示を行ってほしい　　等

7. おわりに

2020年度は展示開催なし，2021年度は初めてのオンライン展示，2022年度は小規模のパネル展示・分館巡回展とオンライン展示（初めてのハイブリッド展示）と，COVID-19の影響から段階的に回復しつつ新しい試みを加えてきた。

2023年の今年度は，リアルな展示を全面解禁し，教員による全面的な企画・監修の下，展示WGによるパネル及びWebサイトのコンセプト提案と作成，さらに英訳サイトの作成（別稿）と，本格的な教職協働による企画展示となった。この教職協働展示は，「2.方針およびテーマ」でも述べているように，元々は，展示の質の担保や特定の資料に展示が集中しがちであるといった課題解決の必要性から生まれたものであったが，結果として，その課題解決のみならず，様々な点で得るものの多い展示となった。

特に展示内容については，教員が博物館で数多くの展示を実施してきたエキスパートであったため，資料の分野と展示の双方に関して，専門的知見を踏まえた上での一般観覧者向けの構成と解説の作成，展示と資料双方の内容を考慮した展示資料の選定，章タイトルの付け方，など，全てにおいて非常に勉強させていただいた。また，教員と職員がコミュニケーションを取りながら一つのものを一緒に作り上げたという点で，「教職協働」の実践として，職員にとって非常によい経験となった。

教員への負荷が相当に大きくなってしまったことや，スケジュールが遅れがちになってしまったことなど，反省点は諸々あるが，今回の経験を活かして，来年度も教職協働による企画展を実施したいと考えている。

最後になりましたが，企画・構成・資料選定・解説作成と，本展示を全面的に担ってくださった文学研究科の籠橋准教授に心よりの感謝を申し上げます。

おのでら　つよし，附属図書館情報サービス課専門職員
なかじま　だい，附属図書館情報管理課雑誌情報係
かげやま　けいた，医学分館整理係
たけだ　さゆり，附属図書館総務課学術情報基盤係
たなぶ　こうへい，農学分館図書係
こばやし　ちなつ，北青葉山分館図書係
すだ　ようこ，附属図書館情報サービス課貴重書係
にしむら　みゆき，工学分館管理係
ささき　ともお，附属図書館情報サービス課貴重書係長
まごめ　もとこ，附属図書館情報サービス課専門員
はんざわ　ともえ，附属図書館情報サービス課長